

看護学生から見た看護師の子育ての苦悩

○横山知弘

小野聡子

徳田克己

(筑波大学附属聾学校) (筑波大学大学院人間総合科学研究科) (筑波大学社会医学系)

1、はじめに

看護師の子育てに対する不安は大きい。それは、現時点で実施されている公的子育て支援事業のほとんどが一般的な家族形態と就業スタイルをとる家庭をモデルとしており、深夜勤務や不規則勤務のある看護師をサポートできるものではないからである。このことは看護師の養成の段階においてもしばしば話題になっている。看護学生たちにとっては、「看護師になる＝子育てに苦労する」ととらえられている傾向がある。そこで、看護学生に対して看護師の子育ての実態の把握状況とそれに関する意識を明らかにする調査を行った。

2、方法

(1) 調査対象者：関東にある大学・短期大学の看護学科の女子学生119名（一年生42名、二年生77名）を対象とした。

(2) 調査手続き：調査は質問紙を用いて授業中に実施した。調査は2003年12月に実施された。

(3) 調査項目：学生の属性、将来希望する子育て、子育て支援のニーズに関する項目を設定した。

3、結果と考察

(1) 看護師の子育てについての考え

看護師の子育てについて考えたことがあるかについて尋ねた結果を表1に示した。よく、または時々考えると回答している学生が80%近くを占めている。

表2に、どのようなことを考えるかについての回答をまとめた。子育てと仕事の両立について考える人が55%

表1 看護師の子育てについて

よく考える	19名 (16%)
時々考える	73名 (62%)
あまり考えない	23名 (19%)
全く考えない	4名 (3%)

(%の母数は全回答者119名)

表2 どのようなことを考えるか

子育てと仕事の両立の不安	40名 (55%)
子どもにかかる負担	19名 (26%)
家族（祖父母を含む）の協力	8名 (11%)
子どもの預け先	7名 (10%)
産休後の仕事復帰	7名 (10%)
産休・育児休暇	3名 (4%)
育児環境	2名 (3%)
その他	6名 (8%)

(%の母数は回答者73名)

(複数回答)

おり、まだ学生であるにも関わらず、多くの人が子育てと仕事を両立させることの大変さ、不安を感じているようである。また、仕事をしている時間に子どもと関われないことによる子どもへの負担や産休後の仕事復帰について具体的に考えている人もいた。

また、看護師が子育てをしながら仕事をしていくことについて、どのように考えるかを表3に示した。育児と仕事の両立は難しいと考えている学生は61%と多いが、周囲の人の協力や子育て支援があれば夜勤もこなせるのではないかという回答も多くあった。

(2) 将来の自分の子育てについての考え

表4に、自分に子どもができれば、仕事をどのようにしようと思っているかについての回答をまとめた。仕事を辞めて子育てに専念したいと答えている学生は約3割であり、逆に、仕事を続けたいという回答が約7割と多い。しかし、夜勤などのない状況や、育児を助けてくれる人が周りにいればと条件付きで続けたいという回答が多い。

仕事をやめて子育てに専念したいと回答した36名に対して、仕事をやめた後はどのようにしようと考えてい

表3 育児と仕事の両立に対する考え

育児と仕事の両立は難しい	73名 (61%)
育児を助けてくれる人がいれば、夜勤でも働ける	71名 (60%)
育児中は夜勤などのない状況でないと働けない	47名 (40%)
夜間保育やベビーホテルを利用すれば夜勤もこなせる	29名 (24%)
育児中もそれ以前と同じ勤務状況で働くことができる	14名 (12%)
その他	4名 (3%)

(%の母数は全回答者119名)

(複数回答)

表4 子どもができれば時の仕事の継続

育児中は、夜勤などのない勤務状況で働きたい	51名 (43%)
育児中は、仕事をやめて子育てに専念したい	36名 (30%)
育児中も、それ以前と同じ勤務状況で働きたい	27名 (23%)
育児を助けてくれる人がいれば夜勤も構わない	26名 (22%)
その他	2名 (2%)

(%の母数は全回答者119名)

(複数回答)

るかを尋ねた結果を表5に示した。子どもがある程度大きくなったら、仕事に復帰したいと答えている人がほとんどであり、そのままずっと家庭に入りたいと答えている人は1割にも満たなかった。

(3) 子育てをするための協力について

表6に、育児には誰の協力が一番必要だと思うかについての回答をまとめた。夫の協力が一番必要という回答が約8割と多かった。夫と家事、育児をどのように分担・協力したいかを表7にまとめた。この結果から、半数以上の者が女だから男だからというような考えではなく、平等に同じ意識で、協力して家事や育児をおこなっていききたいと考えていることがわかった。

(4) 子育てのための離職・転職

子育てのための離職・転職についての考えを尋ねた結果を表8に示した。子育て支援の充実が必要だという人が25%おり、現在の子育て支援では不十分であると考えている学生が多い。現状は仕方がないのではないかと答える学生も23%おり、やはり現在の子育て支援は十分でないと考えられていることがうかがわれる。

(5) 看護師の子育て支援に関する考え方

表9に、看護師の子育てにはどのような支援が必要かについての回答をまとめた。対象が学生にもかかわらず、

表5 仕事をやめた後のこと

子どもが大きくなったら夜勤 のない勤務状況で働きたい	24名 (6.7%)
子どもが大きくなったら仕事 (夜勤あり)に戻りたい	12名 (3.3%)
子どもが大きくなったら看護 とは無関係な所で働きたい	4名 (1.1%)
そのままずっと家庭にいたい	2名 (0.6%)
その他	1名 (0.3%)
(%の母数は36名)	(複数回答)

表6 育児中、誰の協力が一番必要か

夫	97名 (82%)
自分の両親	13名 (11%)
夫の両親	4名 (3%)
その他	4名 (3%)
無回答	1名 (1%)
(%の母数は全回答者119名)	

表7 夫との育児や家事の分担・協力

できる方ができることをやる	42名 (48%)
半分半分でする	22名 (25%)
家事・育児とも自分が主体で 夫には時々手伝ってほしい	6名 (7%)
夫と話し合って決める	6名 (7%)
夫には専業主夫をしてほしい	3名 (3%)
当番制にする	3名 (3%)
その他	6名 (7%)
(%の母数は88名)	(複数回答)

育児関係だけでなく看護師の復職に対する支援を挙げた者もいた。約6割が保育の支援・充実を考えており、育児支援への関心が高いことがわかる。

4、まとめ

本研究では、看護学生は看護師の子育てについて自分なりの意見を持ち、今後の子育て支援の充実に対するニーズが強いことが明らかになった。今の看護師の子育て事情についてあまり良いイメージを抱いていない看護学生は、就労前から子育てについて不安を抱えていることが結果から読み取れる。それは、学生が子育てと仕事を両立していきたいと考えているからである。両立したいという気持ちはあるが、今の環境でそれが可能なのかどうか、不安に思っているのである。今後とも看護の世界に優秀な人材を確保するためにも、看護師として安心して働いていけるよう子育て支援を整えていくことを学生たちは求めている。

付記：本研究は筑波大学医療技術短期大学看護学科の卒業生である小林真由美、鈴木理恵子、高橋真理、中座由行、平戸麻里子、宮本あすか、向井志穂、山下佳織の卒業研究の一部である（筑波大学社会医学系の徳田克己と筑波大学大学院人間総合科学研究科の石上智美が指導を担当）。

表8 子育てのための離職・転職について

子育て支援の充実が必要	26名 (25%)
仕方がない	24名 (23%)
本人（母親）次第である	9名 (8%)
夫や祖父母の協力が必要	9名 (8%)
差別である	7名 (7%)
もったいない	5名 (5%)
子育てと仕事の両立は難しい	4名 (4%)
残念である	4名 (4%)
職場の環境を整えるべき	3名 (3%)
その他	15名 (14%)
(%の母数は106名)	(複数回答)

表9 どのような支援が必要か

院内保育の充実	23名 (23%)
勤務内容、時間帯の配慮	15名 (15%)
子どもの病気時などの支援	14名 (14%)
保育施設の充実	13名 (13%)
夜間保育	12名 (12%)
24時間保育	9名 (9%)
周囲の人の協力	6名 (6%)
育児休暇	6名 (6%)
経済面の支援	5名 (5%)
復職に対する支援	5名 (5%)
職場の理解	5名 (5%)
病児保育	3名 (3%)
その他	9名 (9%)
(%の母数は回答者99名)	(複数回答)